

とくべつしせき だざいふあと くらつかさ
特別史跡『大宰府跡』・蔵司地区の調査成果

～大宰府史跡第245・246次調査～

九州歴史資料館 文化財調査室 調査研究班

当館では、大宰府政庁跡西側の蔵司^{くらつかさ}の地名が残る丘陵を、平成21年度から継続的に調査しています。現在は、大型礎石建物SB5000東側の平坦地（A～B区）及び丘陵南端部（F区）において、官衙跡^{かんが}の構造解明に向けた重点調査を実施しています。

1. 蔵司とは

古代（奈良・平安時代）に、九州全体の行政や軍事・外交を担当した地方最大の役所「大宰府」には、多くの下部組織^{くらつかさ}がありました。その一つが「蔵司」で、九州各地から税として納められた特産品や布を管理していました。

現在、発掘調査を実施した場所の小字名が「蔵司^{くらつかさ}」であることから、「蔵司^{くらつかさ}」が置かれたと考えられます。

江戸時代の記録によると、蔵司丘陵^{くらつかさ}上には133個の礎石が点在し、古い瓦が多く散乱していたようです。

大正3（1914）年、中山平次郎博士は、蔵司丘陵上の多くの礎石が埋没していることや高熱を受けた鉄製品が多く見つかったことなどを報告し、倉庫や工房が存在したと考えました。その後、昭和8（1933）年、蔵司丘陵上の工事に伴って畑地を地下げした際、大型礎石建物跡が発見されました。

その後、長い間調査が行われていませんでしたが、平成21年度以降、九州歴史資料館が蔵司丘陵の本格的な調査を開始し、今日に至ります。

なお、蔵司地区は大正10（1921）年に政庁跡とともに国の史跡「大宰府跡」に指定され、昭和28（1953）年には特別史跡に昇格しました。

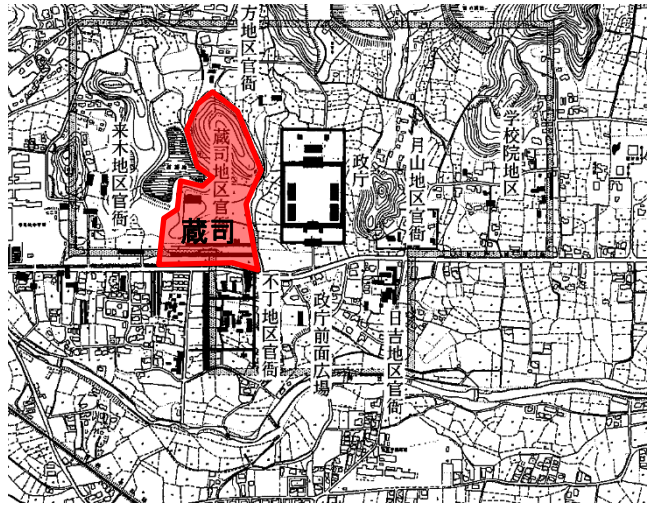


図1 蔵司地区の位置

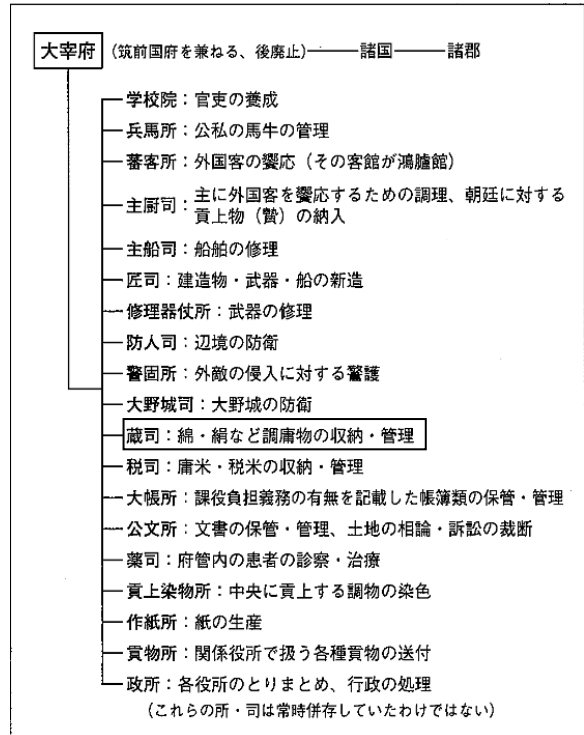


図2 大宰府の実務を担った行政機関「司・所」

2. 蔵司A・B・F区における重点調査成果

今年度の調査成果としては、丘陵南東部の倉庫群の西側で平坦面を取り囲むような柵列を発見したこと、さらに丘陵南端で昨年度見つけていた礎石建物の構造・年代が確定し、大量に出土した瓦が人為的に敷かれていたことや、その西側に壇状遺構が築かれたことが判明したことなどが注目されます。

★今年度の調査成果のポイント

- ①昨年度までに、A・C区の奈良・平安時代の礎石建物群（コ字状配置）がある平坦面の北西側で、柱穴を確認していましたが、今年度さらに追加調査を行ったところ、平坦面の北西側を区画する柵1列と、それよりも新しい掘立柱建物が見つかりました。
- ②上記の柵列の年代は、過去に調査を行った柱穴から出土した瓦の年代から、8世紀代と考えられます。礎石建物群の平坦面の外側を区画するものとみられます。
- ③昨年度発見した、丘陵の南端で密集した大量の瓦と礎石建物の性格を明らかにするため、さらに南側に調査区を拡張した結果、礎石建物は9世紀前半頃に建てられた小型の総柱建物であることが分かりました。小型の高床式倉庫としての役割が考えられます。
- ④礎石建物の北側に広がる瓦の大量密集については、礎石建物が廃絶する前後に人為的に敷かれたものであると推察されます。通路などの下部構造である可能性もあり、9世紀以降においても蔵司地区の官衙が入念に整備されていたことが想定されます。

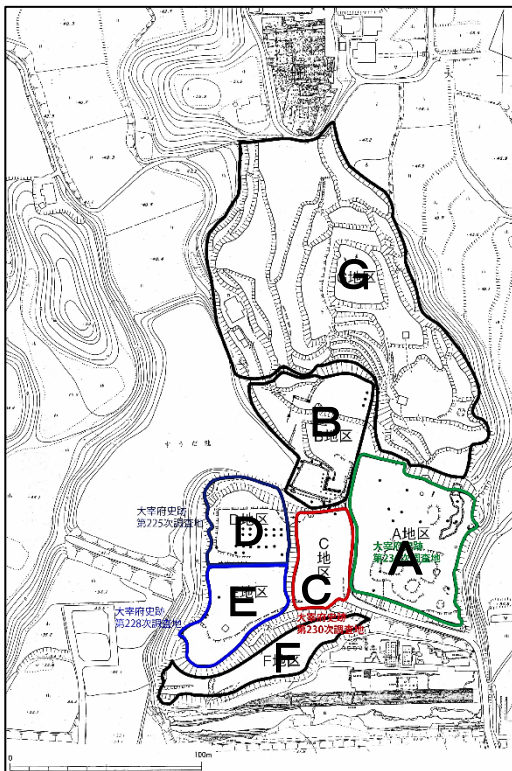


図3 蔵司地区の地区割り

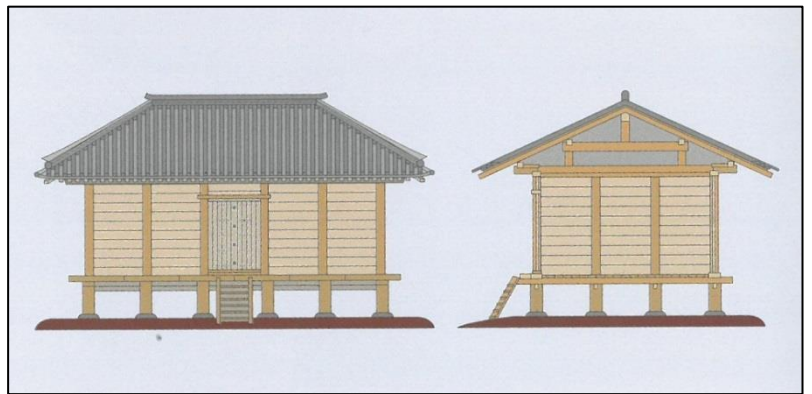


図4 高床式倉庫模式図

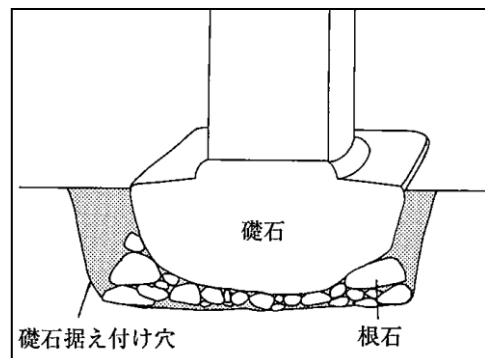


図5 礎石据付状況模式図

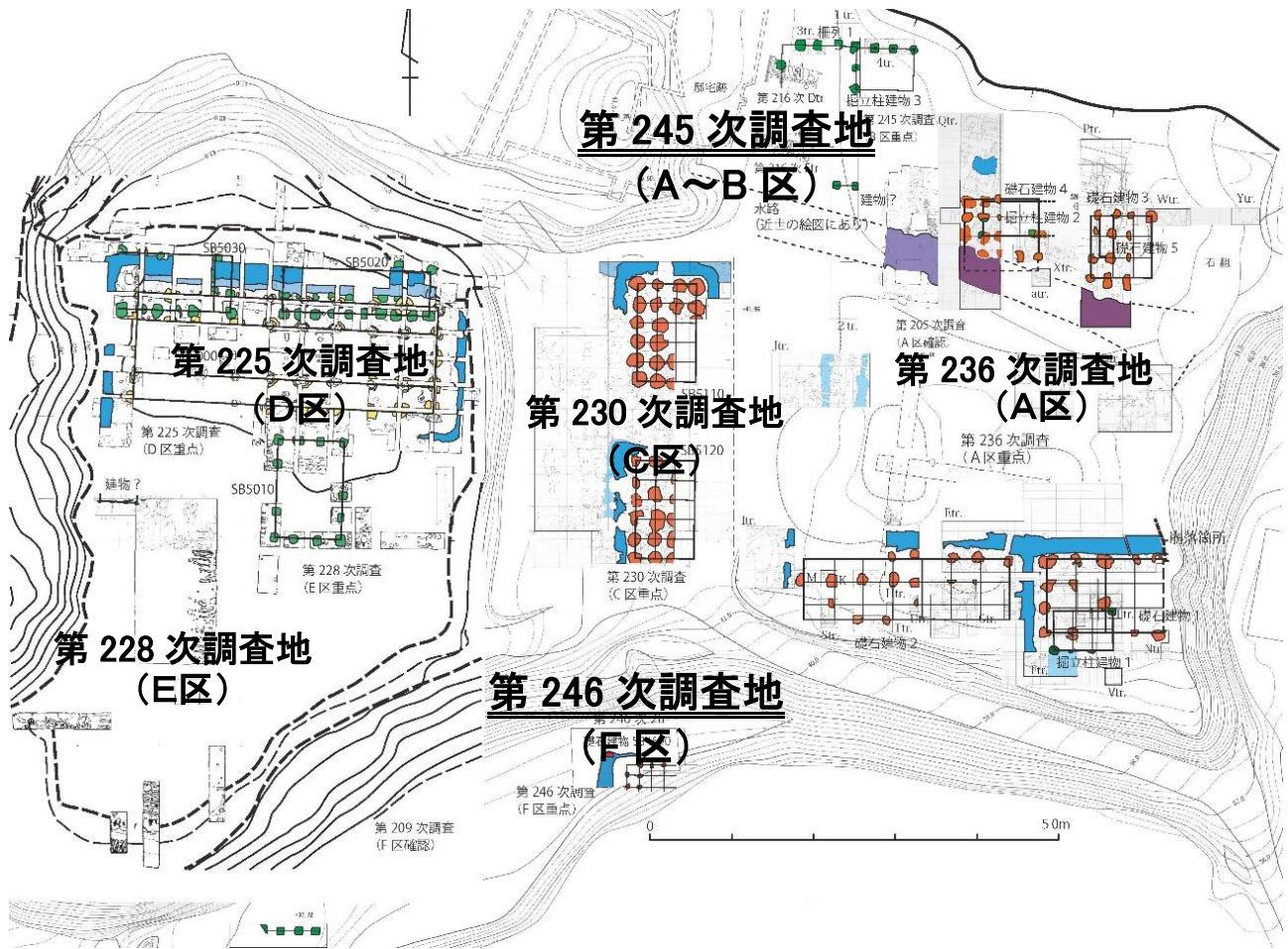
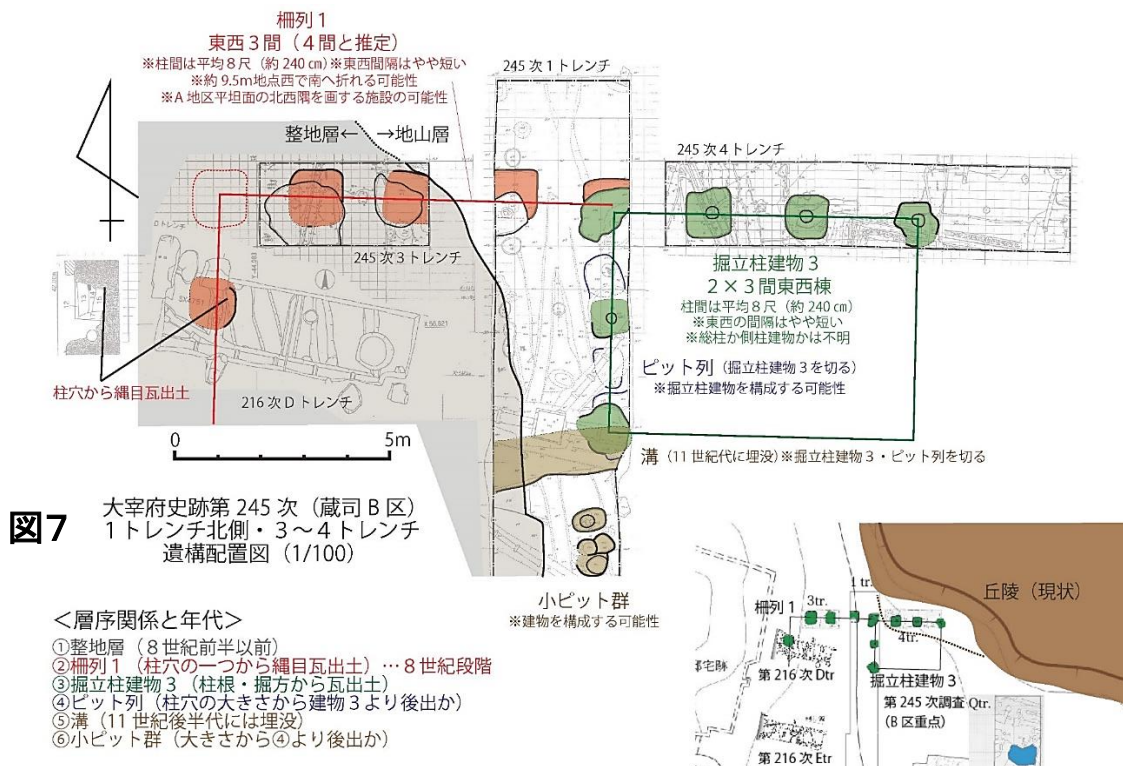
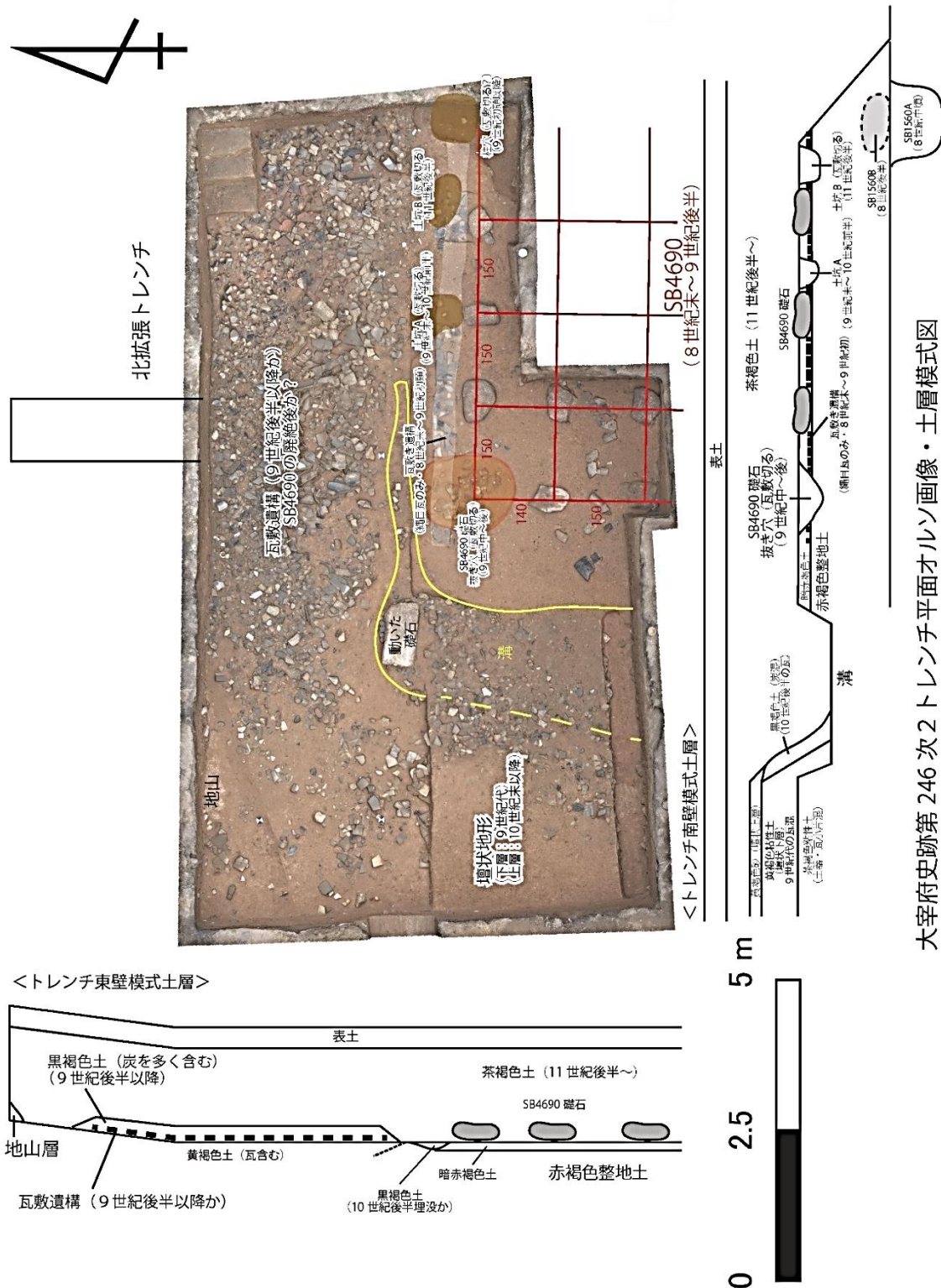


図6 蔵司丘陵南半の調査状況





大宰府史跡第246次2トレンチ平面オロン画像・土層模式図

図8 第246次調査2トレンチ平面画像・土層模式図

- 出展一覧
- 図1：太宰府市2005『太宰府市史』通史編Ⅰ 一部改変
 - 図2：杉原敏之2011『シリーズ「遺跡を学ぶ」076 遠の朝庭・大宰府』（新泉社）一部改変
 - 図3・6・7・8：九州歴史資料館作成
 - 図4：九州歴史資料館2015『大宰府史跡ガイドブック2 特別史跡大野城跡』
 - 図5：奈良文化財研究所2004『古代の官衙遺跡』Ⅰ遺構編

※現在調査中で、今後修正の可能性もあるため、図6～8は転載しないでください。